

2008年6月

CPC：剖検症例検討会（北海道医師会認定生涯教育講座）

## 下咽頭癌治療後に意識障害をきたして急死した一部検例

司会：耳鼻咽喉科	朝倉光司
臨床：耳鼻咽喉科	本間朝
病理：臨床検査科	小西康宏
解説：脳神経外科	大山浩史

### 臨床経過

72歳男性。既往に前立腺癌による前立腺摘除術後と右慢性副鼻腔炎による手術治療がある。主訴は、左頸部の腫瘍と左耳下部の痛み、嘔声、食事中的つかえ感で当院耳鼻咽喉科を受診。CTで左梨状窩に陰影、左頸部に径80mmのmassを認めた。左頸部のmassは頸動脈にinvasionしていた。下咽頭の生検で、低分化扁平上皮癌と診断された。またCTで肺にも多発性の微小転移が指摘され、下咽頭癌（T1N3M1）として治療を開始した。下咽頭に放射線治療66Gy/33fr、CDDP4mg/日30回全身投与を行った。

その後、左眼瞼下垂が出現。脳神経外科を受診し、左海綿静脈洞付近に、転移性脳腫瘍を指摘され、左海綿静脈洞症候群と診断。転移性脳腫瘍に対し、放射線治療60Gy/33fr、CDDP4mg/日8回を行った。

左頸部郭清術を施行した。

その後、左頬粘膜下に腫瘍が出現し、頬粘膜腫瘍摘出術を行った。

本人の希望で、退院し自宅で療養することになった。

約1ヵ月後に、自宅で呼名反応なく、救急車で搬入された。血圧測定できず、頸動脈を触れるのみだった。翌日心停止し亡くなられた。

意識障害の原因、直接死因、原発巣の状態、転移巣の状態の検索を目的に、剖検を行った。

### 病理解剖診断

1. 下咽頭癌放射線化学療法後状態：原発部再発なし転移（低分化扁平上皮癌）：両肺、肝、左腎、左頬粘膜、腹膜、後腹膜 2. 出血性化膿性髄膜炎：転移性腫瘍は消

失 3. 大葉性肺炎（右上葉、右下葉） 4. 気管支肺炎（左下葉） 5. 慢性腎盂腎炎 6. 大動脈粥状硬化症 7. 前立腺癌術後状態：再発転移なし

下咽頭癌の原発部位、左海綿静脈洞の転移部位の腫瘍は治療により消失していた。転移部位は、上記したような部位に認められ、左腎、後腹膜への転移経路が判明し、下咽頭—左腎—椎骨静脈叢を経て、左海綿静脈洞、左頬粘膜へ転移したことが判明した。

意識障害があったことから、開頭し脳を検索したところ、脳表に100ml程度の新鮮凝血塊が見られ、右前頭葉、頭頂葉に出血をきたしていた。組織学的には、凝血塊とともに、密な好中球浸潤をクモ膜付近に認め、出血性化膿性髄膜炎の像と診断した。これが意識障害の原因であり、直接死因と考えられた。髄膜炎の起炎菌等は、標本中に認めず不明だった。

右肺上葉、下葉には、肺胞内に密な好中球浸潤を伴う大葉性肺炎の像を認めた。大葉性肺炎から菌血症をおこし、髄膜炎がひきおこされた可能性もあると思われた。

### 海綿静脈洞症候群について

海綿静脈洞の解剖学的部位が図で示された。この部位は、内頸動脈とともに、動眼神経、滑車神経、三叉神経第一枝、外転神経が貫く。海綿静脈洞症候群の症状としては、同側の眼球運動障害（複視）、眼瞼下垂、眼痛、眼球突出、眼球結膜の充血、眼瞼浮腫および三叉神経第一枝領域の感覚障害があげられる。原因疾患としては、大半は脳腫瘍で、下垂体腫瘍、頭蓋咽頭腫、鼻咽頭腫瘍、転移性腫瘍、髄膜腫があげられる。その他には、内頸動脈瘤、外傷、内頸動脈—海綿静脈洞瘻、海綿静脈洞血栓症、炎症性肉芽腫（Tolosa-Hunt症候群）がある。

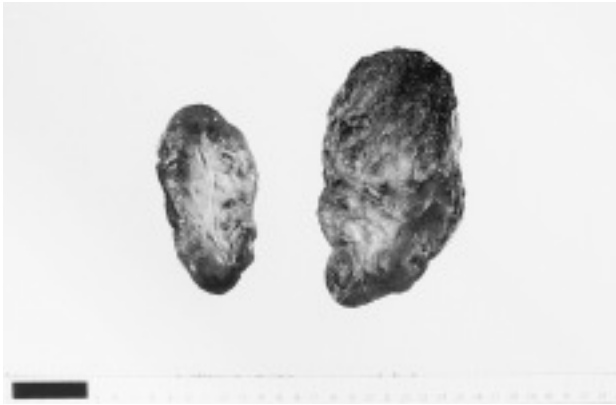


図1 腎の肉眼像：左腎上極に癌の転移を認める。

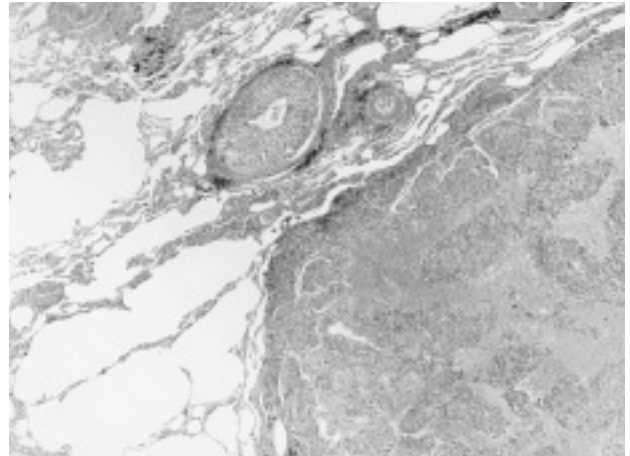


図2 肺の組織像：低分化扁平上皮癌の転移を認める。

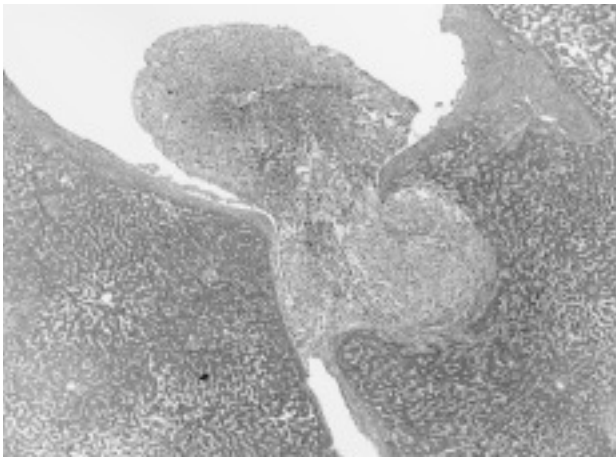


図3 肝の組織像：低分化扁平上皮癌の転移を認める。

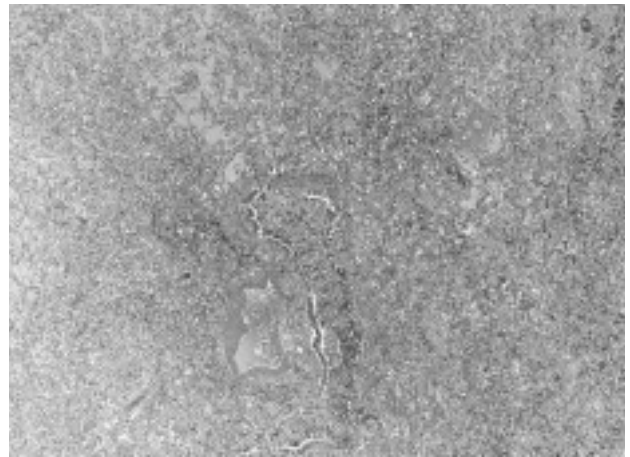


図4 大葉性肺炎の組織像：密な好中球浸潤を肺胞内、気管支内に認める。

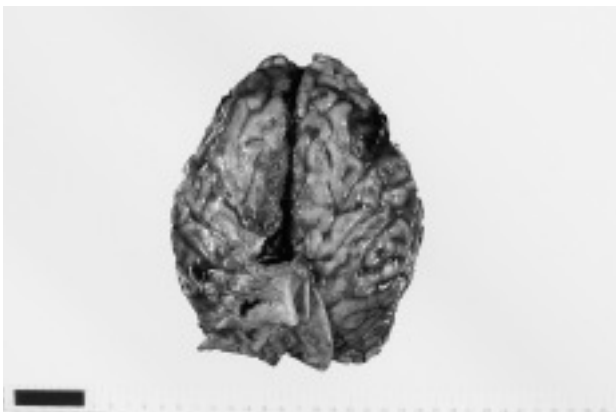


図5 大脳の肉眼像：脳溝と右前頭葉に出血を認める。

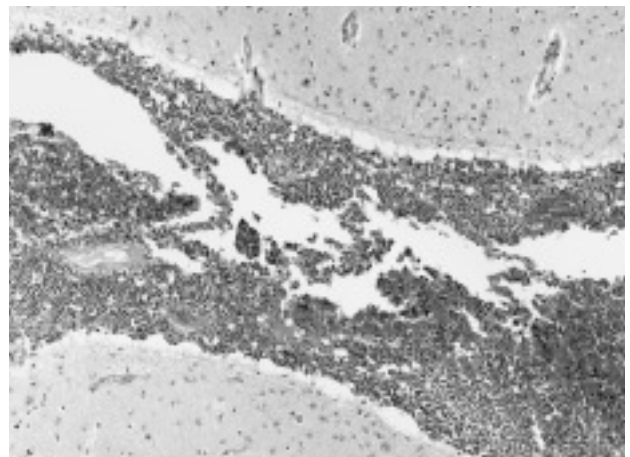


図6 大脳の組織像：脳表面に、好中球浸潤と出血を認める。